

## 寄稿

### 「松江の地名由来は何でしょうか？」

佐和田 丸（10期）



松江観光大使をお抑えつかっている私は、時折、松江の地名由来を聞かれることがある。わかりません、知りません、とも言えず、私なりにしらべてみた。巷間よく知られているのは、下記の諸説である。

(一)『懐橘談』『雲陽誌』という江戸期の地誌によるもので、松江城を築いた堀尾吉晴が、松江の風景が湖面に美しく映え、鱸(すずき)や蓴菜(じゅんさい)を産するところが中国浙江省の淞江府(ずんこうふ)似ているとして命名したという説。

(二)新井白石の著『紳書』によると、堀尾氏の家臣で松江城の縄張工事にあつた小瀬甫庵(おぜほあん)が「鱸の名所也」として命名したという説。

(三)『雲陽大数録』では圓成寺(堀尾氏三代の廟所)開山春龍和尚の命名とし、「唐土ノ松江、鱸魚ト蓴菜ト有ルカ故名産トス、今城府モ其スニコウニ似タレバ、松江ト称ス云々」と記されているという説。

そして、昭和53年(1978)には、島根大学の入谷仙介教授も地元新聞に、命名に苦心していた堀尾吉晴が、渡明の経験のある春龍和尚の進言もあって「松江」を採用したのではないかという推論を発表されたりしていた。

以上の諸説はいずれも、開府後の中国伝來說といつてよい。そして、これらは観光誌などで、盛んに利用喧伝されてきた。

他方、郷土史家の先達である藤岡大拙氏が、これらの説を否定し、『松江』の地名は開府以前からあつたという論考を「松江開府400年 松江藩の時代」(平成20年山陰中央新報社)の冒頭に掲載されている。既にその前の平成13年3月には「湖都松江」創刊号の特別稿に「椿説 松江地名考」として掲載されておられる。

それによれば、「天文3年(1534)、越前福井の人、大森正秀が出雲大社参拝の旅を「出雲紀行」として著わしている中で、“出雲の松江の府に至ったら、その錦浦は磯馴松(そなれまつ)生い連なる美しい風景であつた”と記している」とのこと。

藤岡氏は、「松江の府」はおそらく意宇川の河口あたり、「錦浦」は出雲郷の南岸あたりではないかと推論され、その70年後の松江開府時に、堀尾吉晴はその狭い地帯の地名の「松江」を、末次、白潟二郷を含む広い地帯の地名に拡大して採用し、それが中世から近世の松江への転換点となつたと論考しておられる。同氏は、少なくとも、松江開府の70年前には(もっと前からかもしれない)、「松江」という地名が狭い地域であつたにせよ存在していたという史実に即したこの論考を発表されている。

1998年(平成10年)7月、和歌山毒物カレー事件が発生した。読者もご記憶

の方もおりと思うが、地区で行われた夏祭りにおいて提供されたカレーライスに毒物が混入され、67人が急性ヒ素中毒になり、うち4人が死亡した事件。その犯行現場からほど近いところに、「松江」地区がある。

「松江地区」があると知り、角川地名辞典で調べてみたら、昔は松林に囲まれた美しい入江で、名前もそれに由来し、今は埋め立てられ広大な日本製鉄和歌山製鉄所となっている、とあった。

私はその時、和歌山でそうなら、古代からの人間の営みの盛んなわが「松江地帯」にも、昔から「松林に囲まれた入江」があって、開府以前から「松江」と呼ばれていたとも考えられる。昔の人は、単純にまわりの自然に合わせて命名してきた。田の中に家があったから「田中」。木の下に家があったから「木下」など。松江の場合も、和歌山松江と同様に、中国伝来や、他地域の旅人が命名したのではなく、周りの自然にあわせて、当時の住民が名付けたのではなかろうか。



意宇川河口付近にあった錦浦の様子  
（「松江藩の時代」から）

「松江開府 400 年 松江藩の時代」  
（平成 20 年山陰中央新報社）